

# 日本人社会主義者の朝鮮認識

——一九一〇年代についての考察——

石坂 浩一

はじめに

私はこれまでに、明治期の初期社会主義者の朝鮮認識を整理しておいた<sup>(1)</sup>。彼らは非戦論から出発し社会主義者としての論理を構築する中で、資本家と人民の利害はまったく相反するものであり、戦争は人民にとって何ら利益にならないということを確認していった。これは、明治期の国家の論理に対決する価値観を提起した点で大きな功績であるが、一方で、さまざまな問題点を残したことも事実だった。朝鮮について、侵略が正しくないことは一般論として認識しえたが、日本人ひとりひとりが朝鮮侵略に加担していることを総括しきれなかったことは、その一例である。

社会主義と民族の問題は実にむずかしい課題にちがいない

日本人社会主義者の朝鮮認識——一九一〇年代についての考察（石坂）

や研究を深めつつ、少しずつ宣伝活動を始めていく。彼らの活動の幅はかなり制限されたものであった。

一方、ヨーロッパを中心として発生した世界大戦は、第二インターを崩壊させ、その廃墟に社会主義ロシアを出現させた。これは、日本の社会主義者に革命論の上で大きな影響を与える。加えて、一九一八年の米騒動、翌一九年の三・一運動が、日本を揺るがした。こうした時代の動きを背景に、社会主義者のあいだでも団結と組織運動の機運が盛り上がり、一九二〇年の日本社会主義同盟の結成へと結実していった。

その中で、朝鮮との関わりを、日本人社会主義者はどう考えていたのか。以下、議論を進めていこう。

## 一、一九一〇年代社会主義の位相

### (一) 第二インターとその崩壊

弾圧下にあった社会主義者は堺利彦を中心に売文社に依拠して結束を保ちつつ、時期を待った。一九一二年には大杉栄・荒畑寒村により『近代思想』が創刊され、続いて四年の『へちまの花』の創刊、一五年九月における同誌の『新社会』への発展と、社会主義者は少しずつ啓蒙宣伝活動を前進させた。

い。「しかしマルクス主義ほど徹底してナショナリズムを越える国際主義を鼓吹し実践した思想も稀であっただけに、理念と現実の対照がひとときを際立ってみえることも事実」であり「マルクス主義は、この事実を直視しそれに知的に対応するという点で、これまできわめて不十分であった」という指摘も、根拠のあるものである。

日本人は植民地を領有する側の国民であり、スローガンや文書において、さらには現実の運動や意識において、日本人社会主義者が朝鮮をどう認識していたかは、思想史上の重要なテーマと思われる。本稿では前稿に次いで一九一〇年代の日本人社会主義者の朝鮮認識を考えていきたい。

一九一〇年の大逆事件により、一九一〇年代の社会主義運動は「冬の時代」をすごさなければならなかった。身動きのならない状況の下で、彼らは社会主義についての議論

当時、日本の社会主義者が最も関心を寄せたのは、欧米の社会主義の動向であった。戦争への道を歩みつつあるヨーロッパで、社会主義者が戦争回避のためにいかに闘うかは、注目のまとだったのである。

初期社会主義者は英語を中心に欧米情報を入手していた<sup>(3)</sup>。一〇年代に入ると大杉がフランス語、高島素之がドイツ語を早々に手がけるようになり、読解しうる資料の幅は広がったはずだ。『ノイエ・ツァイト』が読まれていたこともうかがえる<sup>(5)</sup>。

少し時期は戻るが、山川均は「シュツットガルト大会が一九〇七年だから明治四〇年に当るのですが、当時の大論争をわれわれは熱心に読んだものです」と回想している<sup>(6)</sup>。この第二インター第七回大会は、軍国主義に対抗する戦術をめぐる激しい論議がたたかわされたことで知られている。結局、決議案は折衷的なものとなったが、ローザルクセンブルクが戦争勃発に対し大衆的な闘いをもって対抗し、ひいては社会革命へと結びつけていくべきことを提起したところに一つの意義があったろう。

研究史上しばしば無政府主義とされる幸徳秋水らはこの第二インター最左派にシンパシーを持っていた<sup>(7)</sup>。これに対し堺は「正統マルクス派の立場」を自称していたが、ともあれ自分たちの活動が思うままにならない中で、日本の社

会主義者は戦争反対の立場を貫いていた。また、日本の社会主義者は、日露戦争後の運動の過程で、世界認識の書としてのホブソンの『帝国主義論』をひもとくことができた。同書は一九〇七年に西川光次郎が『社会新聞』で紹介した。ホブソンは、帝国主義の主体を大金融業者とし、帝国主義の寄生性・腐朽性を解明している。対外投資による経済の寄生化への道徳的批判と、過剰資本形成の理論的解明とが「相互に切離されて、ある場合には矛盾をふくみつつ、併存せしめられている」<sup>(9)</sup>。欠点はあるが、同書は帝国主義批判の先駆的業績にほかならない。レーニンの『帝国主義』が出るまで、これは日本社会主義者にとっても、一つのよりどころであっただろう。

しかし、ヨーロッパの社会主義者は、いったん戦争が勃発した時にいかに対処すべきかについては不統一だったし、大部分が戦争の回避を楽観しすぎていた。日本の社会主義者はヨーロッパの同志が一貫して闘うことを期待していたにちがいないが、現実には大戦の勃発とともに第二インターは崩壊への道をたどったのである。

日本の社会主義者は困惑せざるをえなかった。堺は、独立社会党も、サンジカリストも、はたまたクロボトキンも、戦争に対する態度には問題があったとし、大戦後にどういう人々が主流となるのかわからない、としている<sup>(10)</sup>。

ただ、興味深いことに、『新社会』の誌上に列挙された取次英文書籍の中に、アイルランドの労働運動家ジェイムス・コノリーの著『Socialism Made Easy』が含まれている<sup>(11)</sup>。この小冊子は、アイルランドの独立を訴え、その闘いの主体は労働者であることを説いている。とはいえ、この本が広く関心を集めた形跡はない。

このように、日本の社会主義者はヨーロッパの社会主義に注目し多くを学んだものの、植民地や民族の問題についてはヨーロッパを教訓化しえなかった。これは、一九一〇年代の日本の社会主義を考える上で重要な問題点である。

## (二) 天皇制と朝鮮

山川菊栄は一九一〇年代の社会主義者のあいだで、社会主義の女性論を確立させていく。それは、統計や調査に裏付けられた科学的認識に基き、体系的論理を展開したということだ。これは、従来のあいまいな女性論に対して、それをのり越える地平を開いた。

体系的な認識・論理の成立は、ある分野の運動の発展に欠かすことができない。ところが、朝鮮問題についての体系的論理の確立のための努力は、不足していたのではなからうか。戦争と侵略による大國化を国民統合の基軸として

その後、一九一五年九月にはツインメルヴァルト会議が開かれたが、この会合の参加者の見解もまとまったものではなく、大部分は旧インターの再建と国際的協力の回復という漠然たる水準であった<sup>(12)</sup>。日本で初めてツインメルヴァルトを紹介した高島が、それを平和回復運動ととらえたのも、もっともなことなのである。

以上で確認できるのは、第二インターの崩壊にもかかわらず、日本の社会主義者は反戦の主張を堅持し、それを世界の社会主義者の重大課題と考えたことである。当時、社会主義は欧米にしか存在しなかったため、彼らの目は必然的にそちらに向けられた。だが、ここで留意したいことは、民族や植民地に関するヨーロッパの社会主義者の論争に、日本の社会主義者の目がどれだけ向いていたか、ということだ。たとえば、ドイツ社会民主党のモロッコ問題に対するあいまいな姿勢について、日本の社会主義者は論じていない。

また、日本の社会主義者が一九一六年のアイルランドにおけるイースター蜂起にほとんど関心を持ちえなかったことも見のがせない。アイルランドについての情報自体、どの程度存在したのかを確認することはできなかった。ともあれ、社会主義者が関心を持つのは一九一九年の独立戦争以降のことである。

きた天皇制は、日本人のあいだに朝鮮に対する差別・蔑視を必然的に植えつけていった。植民地支配の現実の下での、日本人の朝鮮に対する意識は、構造的に生み出されたものである。そうした構造の根底に天皇制が位置するといえるであろう。

では、当時の社会主義者は天皇制に対していかに向き合っていただろうか。

伊藤晃は一九一〇年代を中心に、堺らと袂をわかって国家社会主義へと進んだ高島素之を分析し、天皇制の問題を考察している<sup>(14)</sup>。高島は、米英帝国主義の支配する国際秩序の下で、日本は圧迫される弱者であるとした。そして、資本金家はプロレタリアを犠牲にしてこの国際秩序に順応し利益を得ているが、国民一般は階級のいかに問わず抑圧されているのだと考えた。かくして「高島は、日本のプロレタリアートが敗北する理由を、資本金階級の民族への裏切りに求めた」が、これは、プロレタリアートの意識をナシヨナリズムに転化させる役割を持った。つまり、国家と天皇を資本金家の手から労働者のもとに奪い返すという脈絡で、国家社会主義が導かれるのである。

これに対して、社会主義者の主流たる堺・山川らは天皇制の矛盾を感じてはいた。しかし、その機構やイデオロギ

民衆の手により天皇制を解体する方向性は打ち出されなかった。当時の社会主義者にとっては、大逆事件の記憶はまだまだ生々しい。国家権力に対する恐れが社会主義者に存在したことは確かである。

ところが、一方で、二〇年代のこととはいえ、第一次共産党の参加者が、天皇制を「言われないでもわかっていてのこと」「理論的にはあたりまえのことなんだが、<sup>(15)</sup> どういう処置をつけるかという事で困った」と回顧しているのは興味深い。天皇制の実体や機能について、日本の社会主義者はほとんど分析できなかったのである。そのため、特にイデオロギー的側面において、日本人一般をとらえている天皇制は過小評価されたものと思われる。二〇年代に入っても、日本の経済的側面についての分析がほとんどだった。大衆の力で天皇制を解体していく作業の道すじは、いまだにつけられなかった。これは、大衆を組織化し変革主体を形成していく方法論が欠如していたことも大いに関連している。初期社会主義以来の啓蒙宣伝の手法がこの当時からいまだに継続していた。一九一七年にはロシア革命がおこるが、その具体像や革命党の姿が日本で正確に理解されるには、しばし時間もかかったのである。

天皇制に対する日本人社会主義者の努力の欠如は、朝鮮認識の欠如とアナロジカルといえよう。朝鮮の独立も、在  
一二年一〇月、保証金を納めない非時事雑誌として出発した。寄稿者の顔ぶれも多彩で、社会主義に無関心な者も含まれている。

同誌の朝鮮関係記事は数も少なく断片的である。まとまったものとしては、大杉が一九一五年に東洋の植民地各国でおこった抵抗運動について述べたものをあげられよう(③)。大杉は、自分たちは植民地と同様に言論の自由を許されていないので同情を表明することさえできないが、新聞報道をまとめることにした、と前向きしている。大杉は、インドや台湾について述べたすえに、朝鮮にふれる。大杉は、「或る陰謀事件」が裁判所によって審理中であるとし、皮肉をこめて「何れにしても朝鮮は陰謀の国である」と述べた。そして、安重根や崔益鉉の例をあげ「各地に於ける暴動、其他殆んど数ふるに違がない」と抵抗の盛んなことを記しつつ、一九〇七年の亞洲和親会に朝鮮の同志が参加していたと付け加えた。

大杉は同じ号の別な文でも、「朝鮮併合の爲めに日本人の物質的精神的生活が何れ程高められたかと云ふ問に対しては、何等首肯すべき明確な答はまだ与へられてゐないやうである」と、朝鮮支配を婉曲に批判した。同時に大杉は「多くの人は其の答を与へられない前に承認してゐる」として、彼のいう「政府的思想」の根強さを認めている(④)。

日朝鮮人労働者との連帯も、多くの社会主義者は自明のことと思っていただろう。だが、日本人労働者の中で朝鮮の問題をどう宣伝するか、日本人と朝鮮人との交流をいかに深めるか、などの具体的方策はなかった。朝鮮人が労働者として多数日本にやってくることに、彼らは有効な対応策を提案できずにいたのである。

## 二、諸刊行物の検討

次に、第一章で述べた論点を確認しつつ、一九一〇年代に出された社会主義系統の諸刊行物の論調を、朝鮮問題を中心にして検討していきたい。この中には、一九二〇年代にかかるものもあるが、基本的に一〇年代を中心とする刊行物を選択した。後掲の朝鮮関係記事目録の番号を本文中で使用する。なお、『へちまの花』は全体の量も少なく、朝鮮関係の記事もないので、ここでは検討を略す。

### (一) 近代思想

『近代思想』は大杉と荒畑の二人が社会主義運動の再起のために出した文芸誌である。厳しい弾圧のために、一九  
以上の大杉の文は婉曲だが、植民地支配を否定し抵抗運動に共感する書き方である。日本人の多くが植民地支配を容認してしまっているのをきちんと指摘したことは興味深い。だが、植民地における弾圧と日本におけるそれとを同列に考えているのは気がかりではある。とはいえ、そこから、植民地の抵抗運動に対する大杉の共感が発しているのも確かであろう。

荒畑も、インドにおける反乱をあげつつ、日本は英国のための東洋の番犬か、と問いかけたが、<sup>(16)</sup> 非時事雑誌でもありこれ以上の批判はむずかしかっただろう。

土岐哀果は朝鮮からローマ字の通信を送り、パゴダを見て加藤清正の侵略を思い起こし「いくさ人の犯罪のあとが五〇〇年のちに残っている」とした(①)。彼は朝鮮や中国を旅しての歌集『竹みて』で紹介されてもいる(②)。特にローマ字の通信のほうは、現在の侵略に対する批判に通じていると考えられよう。

以上のように、『近代思想』は朝鮮を述べるにあたって非常に慎重である。これはしかし朝鮮問題に限ったことではない。

一方、中国について、荒畑が第一巻第一二号に小説「或る男の影」を書いた。何人もの日本人が革命渦中の中国へ向かうのを見送った二人の男が会話を交わす。

「一体、自分の国の事はウツチャツといて、他人の国の革命にばかり熱中するのは、随分妙なものと思ふんだけれど、然しその心もちは確かに同感が出来ぬネ……。僕等にしたって、若し支那の戦争が純粹なアナキストの革命運動だったら、それこそ飛んで往くネ。」

「そうだ。つまり何かやりたいといふ、その心もちだなきに抑圧された状況下で日本の社会主義者が中国革命に心をとめかせたことがうかがえるが、荒畑が登場人物に語らせているように、これは日本での運動を放棄した非主体的な発想でもあった。

また、大杉は第二巻第四号の編集後記で、中国のエスペランティスト師復からの手紙を紹介し、その「排斥軍国主義」「反对祖国主義」という内容が「痛快」だとしている。荒畑・大杉のいづれも、中国革命の民族主義的な面には注意を向けていないことがわかる。

ほかに、荒畑が第三巻第三号の「事実と解釈」で、死去したケア・ハーディーを、ポーア戦争反対やイギリスのインド統治批判の点から評価していることを指摘しておきたい。

このように『近代思想』の朝鮮論は慎重なもので、論理的に初期社会主義の水準を出るものではなかった。

を侮蔑し、あらゆる暴虐を恣にする<sup>(17)</sup>とある」というのである。山口が下関に生まれていることが、こうした在朝日本人の問題に着目させた一つの要因かもしれない。

だが、朝鮮政策への批判はやはり婉曲なものとなっている。たとえば、堺が「日本は今台湾朝鮮を少々持余してゐる」としたり<sup>(18)</sup>、台湾・朝鮮などでの反乱の動きが、「本人共には大不幸に」鎮圧されたと皮肉っぽく書いたり<sup>(19)</sup>しているように。

三・一運動について正面から論じた文は一つもない。ただ、一九一九年六月に、張継らの日本人に対するアピールを紹介する中で「殊に中国人が日本に対し怨恨と恐怖とを抱くに至れる左の事実あり。第一は朝鮮問題即ち是なり。

……日本の朝鮮を併呑する、中国本部を侵略する端と見るの故なり」という部分を堺が摘記した<sup>(20)</sup>。日本帝国主義の弾圧に対する批判を、他人の言葉を借りて行なっているわけだ。また、その前の号で堺は、総督文官制に婉曲に批判を加えた。それは、日本政府は人種差別撤廃を主張しているのに「何で自国領土内の鮮人を賤人あつかひにするのか。独立時代よりも遙かに寛大な自由な政治の下で遙かに幸福な生活を送りながら、其の恩誼を忘却して騷擾を起すとは、鮮人も余りに物が分らなすぎる」など、完全に反語の形で書かれている<sup>(21)</sup>。「苛政は虎よりも猛し」とい

(二) 新社会・新社会評論・社会主義

一九一五年秋に堺らがおこした新社会は、日本社会主義運動の中央機関誌的角色を果たし、『新社会評論』『社会主義』と改題されながら一九二一年まで続いた。いわば、六年間にわたり日本社会主義のオピニオン・リーダーであった。

同志の朝鮮認識をいくつかに分けて見ていこう。まず第一に、日本の朝鮮侵略を比較的具体的に批判するいくつかの記事が存在する。夭折した山口孤剣が一九一六年に、朝鮮の鉦山利権にむらがる日本人の姿を批判した<sup>(22)</sup>。一九一五年一二月に朝鮮鉦業令が公布され翌年四月に施行となったが、その前日に京城の郵便局には鉦山探掘出願書が山をなしたというのである。その中には頭山満・内田良平らも含まれており「浪人が資本家の走狗たることは此の一事でも説明される」と山口は記している。彼は翌年、三井の朝鮮における侵略についても批判を展開した<sup>(23)</sup>。これは、三井の不正を様々な面から糾弾した一文だが、特に朝鮮に関しては金剛山麓の国有林盗伐事件と、忠清道でのタングステン盗掘をあげた。

山口はすでに一九〇三年、その著『破帝国主義論』で「韓国に於ける日本国民の亡状」について述べていた。二〇万人をこす在朝日本人が「其の数の多きを恃んで、韓人

う言葉を引いた安成二郎の一文も完全な皮肉である<sup>(24)</sup>。『新社会』はしばしば発禁のうき目にあっていたので、こうした表現をとることもやむをえないのが現実だった。しかし、こうした書き方であれば結果として説得力が限定されてしまうことも認めないわけにはいかない。

また、堺は、日本人は日露戦争で中国・朝鮮において犠牲となったが、資本家だけは何らの犠牲も払わずに自己の利益追求にのみ腐心してきた、と述べている<sup>(25)</sup>。堺の真意が戦争・侵略への反対にあることは疑いをいれないが、これは侵略の利益を広く分配せよという意味になりかねない、ある意味では高島素之にも通じうる発想であろう。初期社会主義の時代には、こうした発想はしばしば表明されたが、一九一〇年代にはあまり見受けられなかった。

次に、『新社会』が在日朝鮮人労働者の問題に関心を寄せたことは注目されてよい。高島は「日本の『日米問題』」と題してこの問題を扱った。日本でストライキがふえ賃金の上昇するに伴い、資本家は低廉な労働力としての朝鮮人に着目したが、日本人労働者からすれば朝鮮人は「スカッブ」にほかならない。日本は土地が狭く人口過多だと称していた「帝国主義の先生たち」はこの現象をどう解釈するのか、と高島は問う<sup>(26)</sup>。高島は、最近の労働争議を列挙した中でも、熱海の鉄道工事における朝鮮人のストをあげ

ている。

その次の号でも、堺が同じ問題をとり上げた。この間、朝鮮人労働者の移入が非常に多く、「内地」労働者は駆逐され賃金も下落した、中国人労働者まで導入されつつある、資本家は利益の追求に没頭しているのに世の識者はなぜ資本家の温情にすがれというのか。これが堺の文の大意である(8)。

高島・堺ともに、説明が現象的に終わっていることが気にかかる。朝鮮人労働者の増加をうけて、日本人一般の被害者意識や排外主義は高まっていたのが現実だろう。『新社会』の読者は限られた範囲でしかなかったであろうが、大切な課題をとり上げながら、大衆に向かい合う視点が欠けていたことを指摘せざるをえない。

しかしながら、朝鮮人と日本の社会主義者とのあいだに貴重な交流が生まれてきたことも、誌面からうかがえる。たとえば、李達という人物である。堺は李から送られた『新朝鮮』を紹介し、「私は本紙の全ての記事に依って朝鮮に於ける民族運動の実に強固であり且つ熱誠である事を極力報道して見たい」という言葉を摘記している(13)。また、李が大邱の監獄から山崎今朝弥にあてて出した手紙も紹介された(15)。

文芸では中西伊之助の「若き改革者」(9)と吉田金重の

帝国主義の追認と批判しつつ、民族は人類の歴史の一定の段階に至って形成されたものだから、民族についてのみ永遠性を主張するのは誤りだとした(19)。

こうした論理は、初期社会主義以来の民族観の一つのまとめであり、原則的な意味では真理を含んでいる。それはまた、国家社会主義者との論争の中でも、一層堅持されざるをえなかった。しかし、現実に対する洞察力を欠くと、誤った解釈を下すものともなった。

たとえば、堺はチェコの革命運動をあげて、ドイツがアイルランドの反乱をひき起こそうと「突っつい」たのと同様に、イギリスなどにそのかされた動きだと指摘する。堺は続けて、民族的独立の運動も次第に階級的な闘いになりつつあるので、そのかした英仏などにとっても、チェコの運動は憂慮の種になっていくだろうと推測した(20)。彼は別の論稿では「民族的国家は既に過去の夢」とも書いた(21)。

堺はアイルランドについても何回か触れたが、アイルランド独立戦争の始まりに際しては「イギリスもこんな内顧の憂を持ってゐるので、余り調子に乗った事は出来まい」と皮肉を投じた(22)だけだ。だが、その後の闘いの高揚を見て、堺はシン・フェインの実質が「革命的社會主義になりかけてゐる」と評価するようになる(23)。

こうした堺の論調には、民族独立運動や民族主義への過

「ホンスの響」(14)がある。中西の作品は、朝鮮の監獄に投ぜられた主人公を描いたものだが、たったひとこと「朝鮮」という言葉が出てくることで、描かれている場が朝鮮であることがわかるにすぎない。この小品だけでは、後年の名作「赫土に芽ぐむもの」を予想することはできない。吉田の作品は、朝鮮人が後景に数行登場するのみである。一九二一年に本誌が『社会主義』と改題されてからのことだが、日本社会主義同盟第二回大会の宣言案が掲載されている(16)。ここには、東洋においてプロレタリアが力をつけ、インドや朝鮮における独立運動が階級的な方向性を持つに至ったことが指摘された。『新社会』の到達点を知る上での、一つの象徴的な文書ともいえよう。

次に、もう少し広い意味で民族の問題についての論調を見よう。民族の問題に対し階級の問題を対置し、後者の優越を説く論理を提起したのは山川均であった。社会が「掠奪階級」と「被掠奪階級」とに分裂してからは、民族同士の闘いよりも、民族内部の階級同士の闘いのほうが本質的であり、民族間の戦争がたえないのも支配階級同士の利害の衝突のためだと山川は説く。そして、階級社会では「最早真の共同生活は民族全体に亘って存在しないで、共通の利害に立脚する一階級の内部にのみ存する」と結論づけた(18)。

山川は別の論稿でも、室伏高信の「民族的伝統主義」を

小評価がはっきりと現われている。アイルランドやチェコの運動が外部のそのかしによっておこったと考えるのは歴史的に見て正しくないし、これは民族主義運動における社会主義的傾向を、それだけ切り離して高く評価する考え方と表裏一体のものだろう。

これに対して注目すべきは、レーニンの民族論を紹介した高島の論稿だった。ロシアで社会主義が実現すれば、植民地・被圧迫民族の解放を条件として各国に講和を提議するし、ロシアはそれに先立っていっさいの民族の解放を断行する、というレーニンらの主張を高島は伝えた(24)。簡単ではあるが初めての紹介であろう。

さらに中国についてはどうだろうか。日本の社会主義者は一九一〇年代から交流があったので、中国人活動家を身近に感じたことであろう。『新社会』でも、石川三四郎が宋教仁・章炳麟を、堺が張継・戴天仇を紹介している。こうした交流からくる親近感に加え、中国は植民地ではなかったの朝鮮よりも論じやすかったという条件が存在しよう。堺は「日本人の多くは、戦争をすれば必ず勝つもの」と信じて居る」と青島を占領した「慢心せる日本人」を批判した(25)。日本人と中国人とでは米国でも扱いがちがうので自分日本人に生まれてよかったという鈴木文治の話も、和田久太郎が痛烈に皮肉っているのも注目される(26)。

ところで、堺は一九一五年に、中国革命は明治維新やフランス革命と同じ性質のものだと記している。そして、今後何回かの小革命をへてから中国は資本主義国家となり、それで初めて真の社会主義運動がおこると敷衍した<sup>(27)</sup>。こうした発想は別稿でもくり返されているが、歴史的條件を無視した皮相な見方になってしまっている。つまり、歴史発展はどの民族・国家においても同じ過程をたどるという発想から、中国の民族解放運動を遅れたものと見ているのである。これは、カウツキーなどの影響に加え、中国に対する停滞史観がオーバードラップされたものと思われる。だから、堺は、孫文が板垣退助のようになるのではないかとか、板垣か渋沢栄一か、いずれかの道を歩むだろうとか<sup>(29)</sup>の的外れなことも書いている。

とはいえ、堺もロシア革命の詳細を知り社会主義運動が中国でも勃興してくると、考え方を変えるようになった。一九二〇年、堺は中国各地での労働運動や社会主義運動を概括し「欧州の中で経済的発達<sup>(30)</sup>の最も遅れてゐる露西亞が真先にあの革命を起した事を思へば、支那に存外早く類似の革命が起るまいものでもない」と述べているのだから。

一九二〇年代入ると、中国の民族運動の社会主義化を強調する論調がいくつか登場する。それ自体、誤りではないが、そのことの民族主義的な意味<sup>(31)</sup>を日本人の論者は看

過してしまつたのではなからうか。日本の社会主義者の多くは、民族主義運動が社会主義運動へと、とってかわられるべきだと考えた。民族より階級を優先する機械的な発想は変わってはいなかった。

このように、『新社会』は、朝鮮認識については目立つたものがないが、民族の問題についてのいくつかの前進もかいまみることができるといえよう。

### (三) 国家社会主義

堺らと袂をわかち、その名のとおり国家社会主義をめざした高島らの『国家社会主義』は、この当時の天皇制国家には受容されなかつた。創刊号は発禁となり、その後も穏健さを強調したが反響を得られず、四号で終わった。朝鮮については、第四号の「遠近消息」欄で伊藤松雄が「朝鮮人は泣いてゐるのか笑つてゐるのかわからない。そこが恐ろしい」と、偏見の断片を書き記しているだけだ。

この雑誌については本稿では、これ以上扱う余裕がない。

### (四) 労働及産業

一九一二年八月、鈴木文治らの手によって友愛会が創立された。役員にも気を使い国策協力的な立場から出発せざるをえない時代状況であつた。その機関誌『労働及産業』

に執筆した顔ぶれも、渋沢栄一のような実業家から、大臣、大学教授、官吏まで名士をそろえている。この雑誌は厳密に言えば社会主義ではないが、一定の労働者に影響をおよぼしたことは確かだ、そこに検討の価値があると思われる。

労働者は国家を支える基であり、国家発展のためには労働者を保護しなければならないし、労働者もそれだけの自覚を持つべきだ、というのが同誌の編集者の考え方であつた。だから、日本は人口をふやし朝鮮・台湾を開発しなければならぬ<sup>(1)</sup>とか、朝鮮人の手中にある朝鮮の商業を日本人の手におさめなければならない<sup>(4)</sup>とかの、労働者に対し上から国家的使命を鼓吹する文もある。友愛会員である労働者自身も、日本は「三韓征伐朝鮮征伐元寇の乱日清日露の役」で海外に武勇をとどろかせたのだと書く<sup>(3)</sup>ほど、国家意識にとらわれていた。

だが、そうした中で朝鮮人の日本への移住について、注目すべき投書も見い出される。福島<sup>(32)</sup>の友愛会員齊藤机友の書いたものである。朝鮮人労働者が低賃金労働力として使われているが、これは彼らが「裏切者」<sup>(28)</sup>ではなく資本家が「裏切者」だからである。朝鮮人労働者も「同胞」なのだから、彼らを排斥すれば欧米の笑い物になるばかり。むしろ、朝鮮人がなせ出稼ぎをするのかを研究しなければならぬ。あるいは、日本人が移住して職を奪つたのかも

しれないから、その出稼ぎの原因を根絶しなければならぬ<sup>(6)</sup>。

この意見は、朝鮮人を「同胞」とするなどの問題点はあるが、素朴で冷静な考え方である。朝鮮人労働者の問題を根本的につきつめていくことは、朝鮮人との連帯を形成する一つの芽になりえよう。鈴木文治も、大戦後の事業縮小時代に備えて、朝鮮人労働者の問題について研究と準備が必要だと提言している<sup>(5)</sup>。ただ、齊藤のように日本人の移住が朝鮮人の職を奪つたのではないか、というような心配はしなかつたのだが。

このほか、野坂鉄が朝鮮の鉄道職工のストライキについて報告した一文<sup>(8)</sup>などがあるが、いずれも簡単なものである。

『労働及産業』では何といつても齊藤机友の一文が可能性を示してくれている。

### (五) デモクラシイ・先駆・同胞・ナロオド

三・一運動からその後にかけての時期、最も積極的に朝鮮問題を論じたのが、新人会の機関誌である。その論調は当初の理想主義的なものから、次第に社会主義に接近していった。

『デモクラシイ』第二号は発禁となつたが、その冒頭は

「朝鮮青年諸君に呈す」というアピール(①)で飾られていた。三・一運動に対する日本の弾圧を「差別的待遇を与へ威力と制度とを以て人民の声を圧伏するが如きは非人道的の極」と糾弾し「予等は兄弟の同胞が自由の天地に真の人類としての正しき生活を獲得すべき日の一日も速かに来らん事を希望して止まない」とこのアピールはいう。そして、日本政府の行為を「衷心より恥辱とし是れを憎悪する」と同時に「兄弟と共に涙の下るを禁じ得ない」と述べた。ところで、この文は、ロシアの「威脅」から祖国を守るなど、日本人は強國に抗して苦闘してきたのに、日本の政治家・軍人は軍國的帝国主義者となって朝鮮を苦しめているのだと敷衍する。自己を利するために他を略奪するほど悪いことはない、将来のため互いに努力しよう、と呼びかけている。

以上のように、この文は軍国主義を批判し朝鮮への同情を表明している。ただ、句節の美しさのわりに内容はあまりない。日本がみずからを守るため強國に抗して戦ってきたというのも客観的事実とはいえない。

その点、同じ号に載った廉尚燮の文章はもっと深刻に訴えている(②)。留学生の独立宣言は、米騒動と同様に「生存の保障を得んとする真剣なる内面的要求」からのもので、言論の自由も教育の自由もなく圧迫をこととしている状況

の誌面から見る限り、朝鮮論はあまり深められず心情的なものにとどまっていると考えられよう。

『デモクラシー』は改題されて『先駆』となるが、最も興味深いのは、北京の『晨报』と朝鮮の『東亜日報』を新入会でとっているという記事だ(⑬)。日本人で朝鮮語を読める新入会員がいたという記録がないので、金俊洙か、ないしは他の留学生が読んでいたのだろう。『東亜』には独立運動関係の裁判についての記事が多い、とも書かれている。

次の『同胞』では、雑誌が社会主義的傾向を帯びてきたこととも相まって、北九州の工業地帯の短いルポがのつたが、そこに朝鮮人夫婦の多いことが指摘されている(⑭)。また、「朝鮮におくる」と末尾に付記された詩があるが、そこには「一つの未知の Republic／爾の生るゝ時こそは／破壊さるべきものゝ破壊さるゝ時だ」と記されている(⑮)。圧制に抗し自由を求めるという点で、朝鮮人も日本人も共通するというコスモポリタンな発想をうかがい見ることができよう。

『ナロード』では、軍備縮小について論じる中で「対外的軍備を同一国家に帰属せる朝鮮民族の自尊心を害するが如き方法に使用する事は、人類第一の理想を抱ける労働者階級の許し得ない罪悪」だとする一文がある(⑯)。朝鮮

の結果である。いくら同化を唱えても、今のままでは説得力はなく、階級的偏見や民族的差別を解消するのが第一だと。朝鮮人の立場からも、言論規制のためにこの程度しか言えなかったのだが、それでも結果的にこの号は発禁となった。

このほか、日本は中国・朝鮮に愛なき権力を強制している(③)とか、朝鮮併合はわが国最大の不利益だ(⑥)とかいう批判がくり返し行なわれた。また、三・一運動後の姑息な改革への批判(⑦)も行なわれている。

新人会の活動を報告する記事には「朝鮮の金君が頃来の暴動の実状及び之に対する人道的な君の批判を語られた」とある(⑤)。この「金君」は明らかに金俊洙のことだが、金は後年「私、新人会に入っておったんですが、朝鮮の独立問題については、会員たちといっぺんも話したことがないんです」と回顧している。これは金の思いがちがいか、あるいは別な理由によるのであろうか。

とはいえ、新人会の日本人はとても楽天的である。別の新人会の記録では、演説会に中国・朝鮮の留学生が出席したので「すっかりインターナショナルな会になった」と記している(⑨)。

このように、『デモクラシー』は当時としてはぬきん出て明確に朝鮮統治を批判した点に大きな意義があるが、そ

の運動への弾圧に抗議しているのは正しいが、朝鮮人が同一国家に「帰属」することを強調しているのは、誤った理解といわざるをえない。『ナロード』に至ると社会主義的傾向がかなり強まり、民族解放運動をめぐっても、真の民族解放は共産党樹立の日だ、というような機械的な論理まで登場する(⑳)。これは、民族というものが存在する現実を軽視している点で、『デモクラシー』の理想主義ないしコスモポリタニズムと通底しているであろう。

ともあれ新人会の一連の刊行物は、朝鮮統治を批判するにおいて、当時としては最も勇敢であった。ただ、批判の内容が乏しく、その後も問題を深めていけなかったところは充分認識しなければならない。

### 三、社会主義者と朝鮮

#### (一) 朝鮮人との交流

次に日本人社会主義者と朝鮮人との交流について述べよう。史料制約から、いくつかの断片的事実を指摘するにとどまらざるをえなかったが。

まず第一に注目されるのは社会主義者横田宗次郎のことである。彼は一九〇〇年代は小倉に住み、『熊本評論』に、朝鮮人労働者増加の問題は大言壮語で論評するのではなく

地道に取り組むべきだという投稿をした人物にはかならない。<sup>(34)</sup>

官憲資料によれば、横田は一九一三年半ば頃から活動に熱心になったという。同年の夏、東京の「シンデカリズム」研究会にわざわざ出席しているためであろう。翌年彼は大阪に転居し、『煙』という新聞を発行し、労働者の組織化を試みる。彼は新聞発行や演説などの「一時的な運動」には反対し、社会主義者の養成に力を注いで、いずれはそうした人々の主導により団体行動を行使していくことをめざした。非常に実践的な考え方の人である。その彼の家へ、一九一四年の秋から朝鮮人鄭泰王<sup>(35)</sup>が転がり込んできて、ともに起居するようになる。鄭は一四年七月に東京から大阪に来たものの、ほかに頼るあてもなかったのだろう。この点について官憲資料は「鄭ハ横田ノ所説ニ感シ同年十月三日以降同人ト同宿シ起臥ヲ共ニシテ其ノ談論ヲ聴キ主義ニ関スル新聞雜誌ヲモ借覽シ遂ニ社会主義ノ趣味ヲ感得シタルモノ、如ク」としている。また、横田の発言として「自分ハ多数ノ朝鮮人ニ交際アリ彼等ハ政治的意味ニ於テ帝國ニ対シ雪辱的行動ニ出テントスル者僅少ナルガ如キモ一般ニ不平ノ余一種ノ危険思想ヲ抱持スル者簇出シ内地居住者中ニモ多数アルヲ認ム」という内容が記録されている。このように、横田は朝鮮人とかなり交際があったようだ。

ものという。<sup>(41)</sup>当局は、李と日本人社会主義者の結びつきを警戒したが、彼は大杉の裁判の傍聴の記録はあるものの、言論宣伝活動に力を注いだようである。

既述のように李は一九二〇年、大邱監獄から山崎今朝弥にあてて手紙を出しているが、その後はよくわからない。また、朝鮮人韓光洙が、一九一八年頃、愛知の松井広文の経営する雑誌『大公論』に副社長としてむかえられ、当局を批判する筆鋒をふるったというのも興味深い事実である。松井は横田宗次郎とも交友があったという。

韓は一九一九年四月から五月にかけて、同誌に「亡民独語」という記事を連載し、植民地支配を批判した。韓は、ハンガリー・朝鮮・インドの運動を軽視するなかれと説き、朝鮮は併合したのではなく征服されたのだ、今や朝鮮には「革命権」と「死」しかない、と訴えた。<sup>(42)</sup>

ほかに文芸作品としては、丹澤の「朝鮮鮎屋」が出色である。<sup>(43)</sup> 圧迫される自民族の身の上を嘆く鮎屋が実は独立運動のために連絡役をしていた人物だったことが示唆されている。そのことが、日本人の目を通して描かれ、その日本人の心理の動きが感じとれることも、作品としての面白味になっている。三・一運動後、ほどない時期の作品なので、やはり触発されて書いたものだろう。

また、横田民蔵が一九一七年に論文で朝鮮人労働者の日

鄭は来阪早々から「朝鮮人親睦会」を組織したが、横田はこれを助けてもいる。とはいえ、肝心の日本人の組織化は、横田の思うようには進まなかったようだ。鄭が一九一五年一月に上海に行き、朝鮮人親睦会のとをまかされた羅景錫もやがて帰国、加えて横田も同年九月に愛知に転居すると、親睦会と社会主義者の関わりはなくなったという。<sup>(37)</sup> 横田はその後、愛知新聞に就職したが、仕事でも運動でも成功せず、官憲の圧迫に憤って、爆弾でも投げられるかとも思ったこともあるようだ。<sup>(38)</sup> 横田のようすがわかるのは一九二〇年までである。<sup>(39)</sup>

このように、横田は、日本人社会主義者として朝鮮人と深い交流を持った先駆的事例である。横田と親しく「熊本評論」の同人であった松隈勇は、釜山の『朝鮮時報』という新聞で働いていたことがあるというが、松隈自身に目立った行動はないので、横田をつき動かしたものが何かは、今のところ見当がつかない。

次に指摘すべきは朝鮮人李達の存在である。李は日本で一九一八年以降、『東亜時論』『革新時報』『新朝鮮』を刊行した。大杉や堺も寄稿しているが、どれも短命に終わったので次々と改題したものと推測される。現物は未見である。『革新時報』第二巻第四号に掲載された堺の「世界の大事勢と民族の覚醒」は、とりわけ小民族の覚醒を主張した

本流入の問題を論じている。<sup>(44)</sup> 客観的に見て、朝鮮人労働者の流入は日本の労働者を圧迫するから、朝鮮に企業をおこして労働力需要を喚起する必要がある、というのが横田の意見である。朝鮮人の日本渡航を禁ずるのは憲法上の住居の自由に反するし、朝鮮人にとって非常に不公平だという横田の論理展開は正当だが、朝鮮での産業振興については学者としてももう少し具体的な提言があってもいいだろう。これは、一つの具体的・現実的な政策提言としての意味があることと思う。

以上のように、一九一〇年代には初期社会主義になかったような、日本人社会主義者と朝鮮人との交流が生まれたことが注目される。

## (二) 中国観との比較

既述のように、日本の社会主義者は辛亥革命以降の中国に大いに関心を寄せた。それはあこがれといってもいいであろう。

橋浦時雄は日記に中国の状況への関心を書きつづけている。彼は一九一〇年三月に福田英子の家で宋教仁と会ったが、宋について「人間がずっとひらけている。日本の亡者のような社会主義者なんかとはドント人間が異う。だから南京は英イテナ」と高く評価した。<sup>(45)</sup>



一九一三年には橋浦は中国に行きたいと矢も楯もたまらなくなつて、堺に中国の革命家への紹介状を書くよう依頼の手紙を出す。しかし、堺は、張継になら紹介してもよいが、行くことに賛成はしないとの手紙をよこす。<sup>(46)</sup>

当時、安易な中国渡航をいましめる堺のような意見はむしろ少数だったかもしれない。中国に渡つた社会主義者の一人渡辺政太郎は「前年支那へ赴キタルハ幸徳事件以来警察ノ取締嚴重ナル為メ手足モ出ス能ハザルニ由<sup>(47)</sup>」と語つたという。また、一九一二年に岐阜のある社会主義者は、日本革命が東京を根拠地とするのは誤りで、中国にならない、日本社会主義者は朝鮮に根拠地を移すべきだ、という荒唐無稽な構想をしたりもした。<sup>(48)</sup>

中国に行つてきた社会主義者が、日本に帰つて中国問題で積極的の寄与した形跡がほとんどないことに注意したい。日本の状況をおきざりにして中国に安易に渡航するよるな非主体的な関わりでは、残せるものがなかつたと考えられる。

しかし、若い世代が受けとめた中国はちがつたものがあった。一九一五年夏休みに中国を旅行した一高生の林要は、排日運動をまのあたりにしながら、一方で中国人の親切さに打たれ、深い印象を残した。あるいは、小岩井浄の場合、一九一八年夏に中国を旅し、日本帝国主義の半植民地に対

する支配の現実に衝撃を受けた。青年たちが中国から得た印象は二〇年代に生きてくることであろう。

ともあれ、状況とも相まつての強い関心は、中国にはあつても朝鮮にはないものだったことが確認できる。しかし、関わり方が非主体的であつたという点では、中国についても本質的に大きな差がないといえよう。

#### むすび

堺利彦は『雄弁』の一九二〇年一月号に書いた「大正八年の社会的総勘定」で、三・一運動について「朝鮮には大騒動が起こる」としか触れていない。官憲資料によると、堺は三・一運動について「怪シムニ足ラス若シ吾国カ他國ニ掠奪セラレタリトセバ如何国民ハ之ヲ黙視スルコト能ハサルト同様ナレハナリ<sup>(50)</sup>」と語つたという。

堺の発言はたしかにもつともではある。しかし、この当然のことが当時の日本人一般には当然ではなかつたのではないか。

以上で検討してきた一九一〇年代の日本の社会主義者の朝鮮認識について、まず指摘しなければならぬのは、認識の深化から社会主義者としての論理化に至る、作業の不充分さであろう。日本の社会主義者は第二インターの崩壊

に出会つても反戦の主張は堅持したし、ロシア革命の画期性も積極的に受容した。また、女性論の分野では、山川菊栄のような論者が認識の深化と体系化に努め、明確な前進を見ている。ところが、朝鮮に関しては初期社会主義の時代と同様の糾弾ないし皮肉に満ちた批判の域を出られなかつた。

山口孤劍が『新社会』で書いたような、朝鮮侵略の具体的事例をもっと指摘すること、客観的に日朝の経済関係を分析すること、などは当時としても可能だったろうが、着手されずに終わった。こうした作業の欠如のため、大衆に朝鮮の問題、朝鮮人労働者の日本移住問題を、説得力をもつて語る事ができなかったであろう。大正デモクラシーという、中途半端とはいえ、それなりに思想の幅を広げる時代性を活用することも、多くの社会主義者はできなかったが、そうした弱さが、朝鮮認識をめぐるイデオロギー的なものを解明できなかったことも関連していよう。

従つて、朝鮮について何らかの運動を形成すること、運動的な提言をすることなどはとうてい望めなかつた。堺の発言にもあるように、朝鮮への侵略・抑圧が不当であることは当時の多くない社会主義者には自明のことだったろう。だが、その先が求められていたのである。

とはいえ、初期社会主義の時代と比べて前進した面も指

摘できる。それは、横田宗次郎のように実際に親しく朝鮮人と接する日本人が登場し、全体的にも交流の場が多くなつたことである。数カ月とはいえ共に起居したという横田の例は貴重で、今後も調査すべき課題にほかならない。また、友愛会員の斉藤机友のように、朝鮮人が日本にやってくることに素朴な疑問を持つ日本人労働者がいたことは、一つの可能性を示している。だが、当時の社会主義運動にしても、友愛会にしても、こうした芽を発展させるほどの理論的・運動的力量はまだ存在しなかつたといわねばなるまい。

一九一〇年代は史料的にも乏しく、特に運動的な面での細かい分析はむずかしかった。今後、ささやかではあつても、新史料の発見に努めていきたい。

#### 朝鮮関係記事目録

##### (一) 近代思想

- ① 栄「大久保より」(1巻9号、13・6) ② 〈新刊〉「佇みて(土岐哀果著)」(2巻4号、14・1) ③ 大杉栄「事実と解釈——植民地の叛逆」印度Ⅱ 台湾Ⅱ 朝鮮Ⅱ (3巻2号、15・11) ④ 大杉栄「所謂政府的思想」(同前) ⑤ 栄「廿日鼠とドラ猫」(3巻3号、15・12)

(二) 新社会・新社会評論・社会主義

- ① 堺利彦「渦巻く流」(2巻2号、'15・10) ② 堺利彦「霜ばしら」(2巻5号、'16・1) ③ 堺利彦「四種の半無意識的活動」(2巻6号、'16・2) ④ 孤剣「浮世巷談」(2巻10号、'16・5) ⑤ 山口孤剣「龍商三井家論」(3巻10号、'17・6) ⑥ 高島素之「火の見台」(4巻1号、'17・9) ⑦ 山川生「ストックホルム大会と独逸多数派の態度」(同前) ⑧ 堺利彦「火の見台」(4巻2号、'17・10) ⑨ 中西伊之助「若き改革者」(4巻8号、'18・5) ⑩ 堺利彦「カライド・スコープ」(6巻1号、'19・5) ⑪ 堺利彦「カライド・スコープ」(6巻2号、'19・6) ⑫ 安成二郎「アフオリズム」(6巻3号、'19・7) ⑬ 堺生「寄贈書紹介」(6巻7号、'20・1) ⑭ 吉田金重「ホンスの響」(7巻5号、'20・7) ⑮ 個人「人の消息と通信」(李達氏より(山崎今朝弥氏宛)) (8巻2号、'20・11) ⑯ 団体消息「日本社会主義同盟第二回大会宣言(案)」(9巻6号、'21・5)

(三) 国家社会主義

- ① 遠近消息「伊藤松雄氏」(1巻4号、'19・8)

(四) 労働及産業

- ① 小河滋次郎「労働の価値」(46号、'15・6) ② 坂本正

- ⑬ 「北九州工業地を巡りて」(1号、'20・10) ⑭ 「闘争か和合か」(3号、'20・12) ⑮ 「生れざる希望」(6号、'21・3)
- ▽ナロオド
- ⑯ 友成与三吉「軍備縮小と労働者」(6号、'21・12)

註

- (1) 拙稿「日本の初期社会主義思想と朝鮮認識——その機関誌紙の再検討」『立教日本史論集』第三号(85・12) および「朝鮮認識における幸徳秋水」『史苑』第四六巻第一・二号(87・5)
- (2) 浜内謙『現代社会主義を考える』(一九八八) 四二頁
- (3) 西川正雄『初期社会主義運動と万国社会党——点と線に関する覚書』(一九八五) 九頁
- (4) 堺利彦「序(売文集の記)」『売文集』(一九二二)、ここでは「堺利彦全集」第四巻(一九七二) 七頁を参照した。
- (5) 小原慎三「ラファルグの認識論」『近代思想』第一巻第一号(12・10) 一四頁は『ノイエ・ツァイト』を読んでいたことをうかがわせる。また、堺が『新社会』で原文オランダ語の「ゴルテル」『唯物史観解説』を訳載したが、これは独語版の重訳であった。
- (6) 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』(一九六一) 三八〇頁
- (7) 飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』(一九七〇) の7参照
- (8) 前掲『山川均自伝』三八二頁
- (9) 降旗節雄『マルクス経済学の理論構造』(一九七六) 二二史苑(第四八巻第二号)

- 雄「最近労働問題」(49号、'15・9) ③ 藤田正義「武士道主義」(51号、'15・11) ④ 向軍治「海外発展論」(63号、'16・11) ⑤ 鈴木生「労働閑話」(73号、'17・9) ⑥ 齊藤机友「朝鮮労働者輸入に就て」(74号、'17・10) ⑦ 労働文学「南品川 鳩生「朝鮮の友へ」(76号、'17・12) ⑧ 野坂鉄「社会の雑事」(82号、'18・6) ⑨ 鈴木生「東奔西走記」(86号、'18・10)

(五) デモクラシイ・先駆・同胞・ナロオド

△デモクラシイ

- ① 同人「朝鮮青年諸君に呈す」(1巻2号、'19・4) ② 廉尚燮「朝野の諸公に訴ふ」(同前) ③ 麻生久「如何に生くる乎」(1巻4号、'19・6) ④ 宮崎竜介「資本主義外交の平和破壊」(同前) ⑤ 「中京と西京」(同前) ⑥ 同人「朝鮮の統治者に与ふ」(1巻5号、'19・7) ⑦ 時評「朝鮮問題」(同前) ⑧ 時評「新朝鮮総督」(幾多のボヘミア) (1巻6号、'19・9) ⑨ 「新人会記事」(1巻7号、'19・11)

△先駆

- ⑩ 時代批判「赤松克磨」同志社の朝鮮人教授任命」(4号、'20・5) ⑪ 「声息交響」(6号、'20・7) ⑫ 「熱風の中で」(7号、'20・8)

▽同胞

- 七頁
- (10) 堺利彦「橙黄橘緑」『新社会』第二巻第三号(15・11)
- (11) James Joli, The Second International, London, 1974, pp. 194-5
- (12) 高島生「万国時事」『新社会』第二巻第五号(16・1)
- (13) 『新社会』第三巻第八号(17・3) 五五-六頁。その後、英文書籍目録に何回か同書が見い出される。
- (14) 伊藤晃「高島素之の思想について」『天皇制と社会主義——高島素之の思想について(続)』千葉工業大学研究報告(人文編)『第二号(一九八五)』
- (15) 高津正道・浦田武雄・高瀬清「『暁民共産党』と第一次日本共産党」、同志社大学人文科学研究所編『近藤栄蔵自伝』(一九七〇) 所収
- (16) 荒畑勝三「事実と解釈」『近代思想』第三巻第三号(15・12) 一一二頁
- (17) 山口義三「破帝国主義論」、『明治文化資料叢書』第五巻(一九六〇) 二五〇-一頁
- (18) 山川均「闘争と人道」『新社会』第三巻第四号(16・12) 一五頁
- (19) 山川均「暴風の前」『新社会』第四巻第三号(17・12) 二四-七頁
- (20) 堺利彦「カライドスコープ」『新社会』第五巻第二号(18・10) 一四頁
- (21) 堺利彦「カライドスコープ」『新社会』第四巻第八号(18・5) 一七頁
- (22) 堺利彦「カライドスコープ」『新社会』第五巻第六号(19・

- 2) 二七頁
- (23) 堺利彦「花の散るころ」『新社会評論』第七卷第三号（20・5）二二頁
- (24) 高島生「万国時事」『新社会』第四卷第四号（18・1）二八頁
- (25) 堺利彦「紅葉黄葉」『新社会』第二卷第四号（15・12）九一〇頁
- (26) 和田久太郎「友愛会の演説を聴く」『新社会』第三卷第九号（17・5）三七頁
- (27) 堺利彦「橙黄橘緑」『新社会』第二卷第三号（15・11）九頁
- (28) 堺利彦「蕾と芽」『新社会』第二卷第八号（16・4）六一頁
- (29) 堺利彦「酷暑清暑」『新社会』第二卷第一二号（16・7）二四頁
- (30) 堺利彦「火の見台」『新社会』第三卷第一〇号（17・6）二六頁
- (31) 堺利彦「千百五番より」『新社会評論』第七卷第四号（20・6）四頁
- (32) 石堂清倫・豎山利忠編『東京帝大新人会の記録』（一九七六）三四頁
- (33) 友岡久雄「民族解放運動に付て」『ナロオド』第九号（22・4）六頁
- (34) 小倉 横田生「同志よ努力せよ」『熊本評論』第三号（17・7・20）
- (35) 鄭は「特別要視察人状勢一斑」の第四から第七では鄭泰信と書かれているが、第八では突然、名前が誤っていたとして鄭泰玉と訂正された（松尾尊允編『続現代史資料（社会主義沿革）』第一卷（一九八四）所収の史料）。ここでは「鄭泰玉」で統一した。なお、一九二二年に朝鮮で事故死する社会主義者鄭泰信と同一人物なのかどうかは確認できなかった。
- (36) 「特別要視察人状勢一斑（以下、状勢一斑と略す）第五」松尾前掲書四一二頁
- (37) 「状勢一斑第六」同前書四五四、四七七頁
- (38) 「状勢一斑第八」同前書六〇二頁
- (39) この年までは『新社会評論』に通信を寄せている。第七巻第四号、第五号参照。
- (40) 岡本宏・上田穰一編『大逆事件と「熊本評論」』（一九八六）二二六頁
- (41) 「状勢一斑第九」松尾前掲書六九二頁
- (42) 同前六六八〜九、六九二〜三頁
- (43) これは『黒煙』第一巻第四号（19・7）に掲載された。表紙では「朝鮮給屋」、本文中では「給屋」とタイトルがちがっている。
- (44) 樺田民蔵「朝鮮労働者の移入」『国家学会雑誌』第三二巻第八号（17・8）
- (45) 山本博雄・佐藤清賢編『橋浦時雄日記第一巻——冬の時代から』（一九八三）一七四頁
- (46) 同前三三三〜四頁
- (47) 「状勢一斑第五」松尾前掲書四〇三頁
- (48) 「状勢一斑第四」同前三七一頁
- (49) 『堺利彦全集』第五卷（一九七一）四七二頁
- (50) 「状勢一斑第九」松尾前掲書六九三〜四頁

（立教大学文学研究科博士課程後期課程）